

王之敬「青氎」逸話と唐宋詩と日本文学

丹羽博之

要旨

本稿は、一海知義先生主催の「読游会」（南宋の詩人陸游の詩を詳しく読む会）発表後の研究報告である。発表の際、議論になった「青氎」の語について調べると、「青氎」には、王之敬（王猷之の字・王羲之の子。三四四〜三八八）の逸話がある。その逸話が白楽天や陸游の詩にも見える。更にこの逸話が日本文学にも利用されていることが判明した。本稿では、その経緯を述べる。会でのやりとりの詳細は仮題『続・一海知義の漢詩道場』（岩波書店〇八年八月刊行予定）を参照されたい。

キーワード：白楽天 陸游 与謝蕪村 六如 中島棕隠

一

読游会で担当した詩を挙げる。

睡郷

睡郷

1 有酒君勿啜 酒有るも 君啜ること勿れ

2 入腸作戈矛 腸に入らば 戈矛と作る

3 有書君勿觀 書有るも 君觀ること勿れ

4 到眼生君愁 眼に到らば 君が愁を生ぜしめん

5 不如睡郷去 如かず 睡郷に去り

6 万事風馬牛 万事 風馬牛ならむには

7 郊墟無來客 郊墟 來客無く

8 風雨送暮秋 風雨 暮秋を送る

9 苔螳虫唧唧 苔螳 虫唧唧

10 霜林葉颼颼 霜林 葉颼颼

11 是時一枕睡 是の時 一枕の睡

12 不博万戸侯 万戸の侯に博えず

13 斗張裁青氈 斗張 青氈を裁ち

14 重衾擁黃紬 重衾 黃紬を擁す

15 華山希夷翁 華山の希夷翁

16 千載可與遊 千載^{とも}與に遊ぶべし

〔通釈〕

居眠り天国

- 1 酒があつても口にしてはならぬ、
- 2 はらに入ると刺す矛となるから。
- 3 書があつても眺めてはならぬ、
- 4 眺めていると愁いを生じさせるから。
- 5 居眠り天国へ行き、
- 6 全てのことと無関係でいるのが一番だ。
- 7 田舎の家には来客もなく、
- 8 風雨の中で秋の終わりを送る。
- 9 苔むした壁で、虫が細かい声で鳴き、
- 10 霜降りた林で、葉がかすかな音を立てる。
- 11 こうしたときのひと眠りは、
- 12 大名の身分にも替えられぬ。
- 13 青い毛氈で小さき帳を作り、
- 14 黄色い紬のふとんを重ねてかぶる。
- 15 眠りの世界で、あの華山の希夷の翁と
- 16 千年もの間、仲間として暮らそう。

【出典】

『劔南詩稿』卷二十三

『劔南詩稿校注題解』此詩紹熙二年（一一九二）年秋作山陰。陸游六十七歲。

〔詩型〕五言古詩

〔押韻〕矛・愁・牛・秋・颺・侯・紬・遊 下平声十一「尤」韻

この詩の十四、五句目の「青氎」も「黄紬」も余り上等のものではなからう、と安易な注をした。

「紙閣午睡」（『劔南詩稿』卷三十一）

黄紬被暖青氎穩 黄紬の被暖く 青氎穩かなり

紙閣油窗晚更妍 紙閣油窗 晩更に妍なり

等の詩からなんとなく、粗末なものを想像していた。一海先生は、推測だけではだめで、そう思う根拠を示すべきとして、黄紬に関して、以下の逸話を紹介された（用例のみを挙げてあると考えた発表者の不注意。実は深い意味があった）。

『劔南詩稿校注』（卷六）「自嘲」詩の注に

蘇東坡「和孫同年下山龍洞祈晴（孫同年の下山龍洞にて晴を祈るに和す）」の詩に「看君擁黄紬、高臥放晚衙（看る君が黄紬を擁し、高臥晚衙を放にするを）」とあり、程繹注に「世伝、太祖謂一県令曰、謹勿於黄紬被底放衙（世に伝う、太祖一県令に謂いて曰わく、謹みて黄紬被底して放衙すること勿かれ）」が引かれている。

この逸話が何と江戸時代の漢詩人中島棕隱の「偶成」詩の「小樓過雨売花声、似警黄紬被底情（小樓過雨 売花の声、警しむるに似たり黄紬被底の情を）」にも引用されていること、江戸詩人の素養の深さを紹介された。しかも、内容を理解して自家薬籠中のものにしてゐる。この棕隱の詩は陸游の詩をも踏まえていることも軽く紹介される。¹⁾これらの例から、ぜいたくな「黄紬」のふとんにくるまれて、ぬくぬくと寝ている、の意味にならう、と。

更に、笈文生先生からは、「被」を「ふとん」と訳すと、誤解が生じる。「被」は「どてら、かぶりもの」。日本でもふとんは江戸時代になつてからできたもの、との教示を得た。

二

一海先生の「黄紬」「青氈」をもう少し詳しく調べるようにという指示で調べ直すと、

「病中絶句六首（其四）」（『劔南詩稿校注』卷十三）に「青氈」について次の注があつた（これも発表前に見ていたが、用例のみの提示と誤解していた）。

『晋書』（卷八十）王猷之伝「夜臥齋中，而有偷人入其室，盜物都尽，猷之徐曰…偷兒，青氈我家旧物，可特置之。（夜齋中に臥す、而して偷人有り其の室に入り、物を盗みて都て尽くす，猷之徐ろに曰ふ…偷兒，青氈は我が家の旧物，特だ之を置くべし，と。）」

青氈は我が家の旧い家宝であるからそれだけは置いて行け、と盗人に語りかけた逸話が残っている。更に調べると、『北堂書鈔』（卷・一九四・魏武青氈）に、

魏武、与楊彪書云、令贈足下青氈牀褥三具。魏武、楊彪に書を与えて云く、足下に青氈、牀、褥の三具を贈らしむ。

の例があり、魏の武帝が重臣に高価な青氈を贈つた例があつた。

先の王之敬の逸話は、唐詩にも詠まれている。全唐詩の索引で調べた限りでの初例は、白楽天「青氈帳二十韻」（3096）である。その末尾に

貧僧応歎羨 貧僧 応に歎羨すべし

寒士定留連 寒士 定めて留連せん

賓客於中接 賓客 中に於て接し

兒孫向後伝 兒孫 後に向いて伝う

王家誇旧物 王家 旧物を誇るも

未及此青氎 未だ此の青氎に及ばず

とあり、「王子敬語儉兒。青氎我家旧物。（王子敬儉兒に語る。青氎は我が家の旧物。）」の自注がある。後世、王猷之の「青氎我家旧物」の逸話がよく用いられ、青氎といえ、旧物で家宝の性格を有するようになる。

一箇月後、その「青氎」のイメージが江戸時代にも広く流布していたことを、会員の青山由起子さん（大手前大学非常勤講師）の報告で知った。「青氎」の項目が、『広辞苑』にもあり、そこには、

青色の毛氎。転じて、その家に古くからあるもの。また、その家の宝物。新花つみ「子が家、長物なし。ただこのふみをもつて青氎とす」とある。あの与謝蕪村もちゃんと利用している。『日本国語大辞典』（二版）を見ると、更に、『浮世草子』（近代艶隠者）の「時は花咲く比。樽に青氎かつがせ、ささへに席を付けて、男女老少あらそひこぞり」の用例や、前掲「新花摘み」に加えて、妻木（松木青々）冬「寒菊や青氎ふるき光悦寺」の和文とともに、『嘯月楼漫稿』（上「偶成」）の

操琴歌白雪、酌酒坐青氎（琴を操りて白雪を歌い、酒を酌みて青氎に座す）

の例が挙げてあった。青氎には、単に青い色の氎の意味で用いる場合と白詩に見えたように、王之敬の故事を背景とするものがあるようだ。

三

更に調べると、「六如庵詩鈔二篇」（一七九七年）にも青氎は詠まれている。

所養松菰狗、一旦失之。踰年復還。感紀其事。養う所の松菰狗、一旦之を失う。年を踰えて復た還る。感じて其の事を記す。

（十二句略）

愛恚未形聖先知 愛恚の未だ形れざるに 聖くも先ず知り
摘耳掉尾毫不差 耳を摘き尾を掉ること 毫も差わず

寒夜被底当湯媪、寒夜被底湯媪に当て

青氈斎中備儉児 青氈斎中儉児に備う

失汝已来意龍鍾 汝を失いて已来意龍鍾

儻者亡几跋思筇 儻るる者の几を亡い跋の筇を思うが如し

鬼錄記日猶祝望 鬼錄日を記して猶お祝望す

万一健在或再逢 万一健在ならば或いは再び逢はん

とあり、飼っていた犬が行方不明になったとき、王之敬の故事を用いて番犬をしていたころをユーモラスに追憶している。

なお、この詩は黒川洋一氏『江戸漢詩選 菅茶山 六如』（岩波書店）にも収められている。しかし、「○青氈 青いもうせん、じゅうたん。○儉児 ぬすびと」とあるだけで、王之敬の逸話への言及が無い。同書の後書きを見ると、黒川氏のゲラ刷りの全部に一海先生も目を通されたようだが、その時は気づかれなかったものであろうか。

「青氈」の逸話はこの他にも詠まれている。

山居 同沖子温韻 山梨治憲

幽居在壑谷 幽居壑谷に在り

門外唯雲木 門外唯だ雲木のみ

窓暗冷藤蘿 窓暗くして藤蘿冷に

庭閑見麋鹿 庭閑にして麋鹿を見る

笑披初服衣 笑いて披る初服の衣

聊抱無名樸 聊か抱く無名の樸

子敬且青氈 子敬且つは青氈

蕉先自黃犢 蕉先自ら黃犢

王之敬の逸話は、このように日本漢詩や和文にも脈々と受け継がれている。先の中島棕隠の「黄紬」の例といい、江戸時代の人々は実に漢文をよく読んでいた。

次に「黄紬」の項目を調べた。『広辞苑』には無かったが『日本国語大辞典』（二版）には、

黄色のつむぎ。夜具をいう。*四海入海（17c前）一八・三「黄紬被を擁して、高臥安眠すべき也」

とある。蘇東坡の詩を講述した『四海入海』の成立は、天文三（一五三四）年という。用例の箇所も、前掲「和孫同年下山龍洞祈晴」詩の講述である。中島棕隠（一七七九～一八五五）よりも約三〇〇年前の室町時代に、すでに「黄紬」の語は高臥安眠と結びつき、蘇東坡の詩とともに日本でも語られていた。『日本国語大辞典』は、『四海入海』の成立を十七世紀前半とするのは、過ちであろう。

まとめ

読游会の発表が契機となり、「黄紬」の語は已に室町時代に日本で語られ、「青氈」の語も江戸漢詩に詠まれていることがわかった。しかも、漢文作品に限らず、与謝蕪村等の和文にも利用されていた。

六如の詩に於いては、中国文学の専家が日本漢詩の注を行い、それを日本文学者が補うことができた。

註

(1) 陸游の人口に膾炙した「臨安春雨初霽（臨安に春雨初めて霽る）」詩の

小楼一夜聴春雨 小楼一夜 春雨を聴く

深巷明朝売杏花 深巷明朝 杏花を売らん

を利用している。

(2) 全唐詩の索引には、「青氈」の用例は十五例。但し、

杜甫の「与任城许主簿游南池（任城の許主簿の南池に遊ぶに与ふ）」

晨朝降白露 晨朝 白露降り

遙憶旧青氈 遙かに憶ふ 旧青氈

の例に見られるように、王之敬の逸話の明確な利用は認めがたい。前掲の白詩を除く全ての「青氈」も同様である。宋詩では、陸游の詩が王之敬の逸話を詠み込んだ初例のようである。